

# ゴリラ女房とその仲間

## エーバーハルト 121 から AT 485A へ

廣田 龍平

### 1. はじめに 「ゴリラ女房」とその類話

沖縄に「ゴリラ女房」という奇妙な昔話がある<sup>(1)</sup>。ある島の川を探検していた若者のグループがゴリラに襲われ、一人だけ捕まって山奥の群れのところに連れていかれた。ゴリラたちは若者の男性に果物などを与えた。それから1年ほど経つと「動物であっても情が湧き出て」、ボスゴリラを妊娠させてしまった。そして子が産まれた。それでも帰りたかった若者は筏を作り、密かに逃げようとしたが、見つかってしまった。それを見たゴリラは、置き去りにされる悔しさと怒りのあまり、自分の子の両足を引き裂いてしまった(1977年8月記録) [読谷村教育委員会、歴史民俗資料館 1983 : 63-67]。

興味深いことに、大正時代の本土でも、同じような話が実話として語られていた。たとえば『現代心中ばなし』(1916)には「ゴリラ女王の恋」の章があり、それによるとボルネオの未踏河川を遡行していた日本人集団がゴリラの群れに襲われ、1人の男が洞窟に閉じ込められた。ゴリラの女王は男を寵愛し、子を産んだ。7年経ち、男は密かに作ったカヌーで逃亡する。そこに女王が現れ、叫び声をあげつつ子を「バリバリと引裂いた」。そして男は、この事件を語ることになる日本人に助けられたのだった [しげおか 2018]。河川遡行など細かい点まで「ゴリラ女房」と一致している。また、大本教の聖典『霊界物語』にもほとんど同じ「猩々姫」のエピソードがある。違いは結末で、半人半獣の赤子は引き裂かれそうになるが、最終的には絞殺され、姫は入水して死ぬ [出口 1924 : 201-223]。また口承としては、伊勢湾の神島で、異類が「緋々猿」の女王になっているものが語られている (昭和初期) [岩田 1970 : 262]。

さらに遡ってみると、江戸中期にも類話があることが分かる。国学者・荷田在満の『白猿物語』(1739)である。それによると、相模の男が無人島に漂着する。島にいた猿の群れの長である白猿に助けられるが、洞窟に軟禁される。しばらくして媾合を求められ、子猿をもうける。3年が過ぎ、船が漂着したので助けを求め、島を離れる。浜辺に白猿らがやってきて悲哀にくれていたが、白猿は子猿を抱いて海底へと心中する [森田 1992 : 2]。この物語もまた、ゴリラ女房の要素をほぼ完備しているが、末尾はやや異なる。特徴的なのは、この物語が事実として語られていることだ。これは実際のところ「ゴリラ女房」や「ゴリラ女王の恋」にも共通することで、動物が人間と交流するからといってフィクショ

ンの昔話に安易に分類することはできないことを示している。

ここまでならばまだ、ゴリラ女房が日本列島に限定された話型だという予想がつく。しかし、まったく異なるところにもゴリラ女房の類話は伝わっていた。ルドルフ・アルトロッキという研究者が、エドガー・バロウズの冒険小説『ターザン』の元ネタを探ろうとして、シカゴ在住の著者に連絡を取ったことがあった。その時の手紙のなかでバロウズが説明するには、1912年以前のある時期に読んだ雑誌のなかに、「遭難してアフリカ沿岸に一人たどりついた船乗りは……ジャングルに滞在せざるを得なかったとき、手懐けた雌の類人猿が彼を愛するようになった。ようやく助けが来たとき、その雌猿は男を追いかけて波間に飛び込み、自分の子供を彼に向けて投げた」という話が載っていたという[Altrocchi 1944: 95]。この物語は明らかに、これまで見てきた物語と同じ筋になっている。また、大正時代とアルトロッキの言う1912年以前はさほど離れていない。ただし、アルトロッキは当の雑誌を見つけることができず、この出典は未解明のままである。

まったく偶然に、筆者は別の地域で類話を発見した。それは1972年、イラク北部の都市ティクリートで出版された雑誌に掲載されたもので、シルーワという山姥のような妖怪の物語だった。ある船乗りの男が夜間、友人の男とともに川沿いの洞窟に雨宿りに入ったが、実は友人は化けたシルーワだった。脚が動かなくなる呪文をかけられ、洞窟に閉じ込められた男は強制性交させられ、男の子と女の子が産まれた。あるとき、何とかして這い出た男は、仲間の船を見つけ、川に飛び込み、引き上げてもらった。シルーワが戻ってきて、悲痛な叫びをあげた。だが彼女は、水に触れると脚が萎えてしまう。そこで子を手に取って、真つ二つに引き裂いた。そして片方を水中に投げ、「半分はお前のだ」と叫んだ[Zeidel 2006: 906–907]。この出来事は舞台が海辺ではなく川辺に変わっているものの、洞窟という状況は同じであり、水域が人間と異類との障壁として働いているのも共通している。事実として伝わっているところも同じだ。

以上の説話を形式化すると以下の通りになるだろう。

- I 人間の男が異類の領域に迷い込む
  - I a そこは孤島／山奥の洞窟であり、容易には脱出できない
- II 人型の異類と深い仲になって子をもうける
- III 異類の領域から抜け出す
  - III a みずから船を制作する／通りがかった船に助けを求める
  - III b 異類は水辺を越えて追いかけることができない
- IV 異類は悲嘆・怒りによって子を引き裂く／子を死なせる

この話型を「ゴリラ女房型」と呼ぶことにしよう。1739年の江戸文学、1912年以前のアメリカの雑誌、1916年の日本の書籍、1972年のイラクの地方伝説、1977年の沖縄の民話——ほぼ同一の話型に属するこれらの説話は、いったいどのくらいの広がりなのか位置

付けられるのだろうか。その特徴はどういったものだろうか。本稿は沖縄の「ゴリラ女房」を起点として、異類婚姻譚の複数の話型を総合することを試みる。

## 2. 説話のグローバルな比較方法論

類似する諸事例が異なる地域にある場合、どのような分析が可能だろうか。まず、類似する原因の説明法として、ロバート・ブラストは「収斂または独立発生」、「伝播」そして「共通起源」の3つを挙げる。そして、事例間に言語的な関連があるか、地理的に連続しているか、つながりのない地域にも類似が生じているか、の3つの判定基準から、それぞれの説明法のいずれが適用可能かを示している [Blust 1981: 285–288]。先に紹介したゴリラ女房型の諸事例は、言語的にも地理的にもつながりがないので、ブラストの基準に従うならば「収斂」（進化学における「収斂」の意味だろう）で説明されることになる。だが、ブラストによる収斂の例示は、吹き矢（インドネシア、南米など）と「血・雷・猿」複合（マレー半島のスマン、ボルネオのブナン）であるが [ibid.: 287]、それらと比較してもゴリラ女房型は、複雑な要素を持つにもかかわらず、また各々の地域の支配的宗教や技術的水準、生態学的特徴などに大きな違いがあるにもかかわらず、登場人物と舞台を入れ替えるだけでほとんど同じナラティブが得られるぐらいには類似している。実際、モチーフとは異なり、民間説話の類似性に関しては、伝播を前提として説明されることが多い [トンブソン 1977; 近年のものとして沖田 2020: 10 章]。したがって、本稿の主要部分は、説話の伝播を前提として、いわば「地図の隙間」を埋める作業を進めていくものとなる。

類似の原因に見通しが立ったならば、類似という事実からどういったインプリケーションを導き出せるかが問題となる。この段階は一般に、共時的分析と通時的分析という両極から探究することが可能である。前者の例としては、小沢俊夫による異類婚姻譚の比較研究が、古代・キリスト教民族・自然民族・日本という区分で自然観の違いを明らかにしている [小沢 1994: 203]。また近年の代表的業績としては、フィリップ・デスコラの比較人類学的研究が挙げられる。デスコラは構造分析を歴史分析より優先することを明言し [デスコラ 2020: 19]、そのうえで、人間と非人間との関係性を、構造的に構築された四つの「存在論」に分類している。他方、通時的分析の大規模なものとしては、ミハエル・ヴィッツェルらの世界神話学仮説が挙げられる。この仮説は、アフリカ誕生以来の人類史的な集団移動を究極的な根拠として、世界各地に伝わる神話のモチーフやプロットを分類し、その成立過程を解明しようとする [後藤 2017]。共時と通時という両極の間には、歴史的な連続性を前提としながらも、変換の操作によって神話の構造を別括したクロード・レヴィ＝ストロースのアメリカ先住民神話研究を位置づけられる [たとえばレヴィ＝ストロース 2018]。

本稿では、伝播の経路については示唆するにとどめ——地理的広さに対して事例が少なすぎるためであり、また既知の事例間の連続性の検討だけでも分析にかなりの紙数が必要となるため——、最終的には、人間と異類を分かちものとしての形象と技術に注目して、動物が人間に変身するアニミズム的な異類婚姻譚と比較し、ゴリラ女房型にどのような特徴がみられるかを簡単に分析したい。

### 3. ゴリラ婿型、中国、仏教説話

ゴリラ女房型と男女が逆転した話も南西諸島にいくつかある。「ゴリラ婿入」(国頭村)では、船が難破して生き残った女が洞穴でゴリラとの間に子を産む。しばらくして船が島に着いたので子とともに乗り込むと、ゴリラが子を引き裂くそぶりを見せるが、結局逃げ切る。子が成長して洞穴に戻ってみると、ゴリラの死体があった〔遠藤ほか編 1990 : 49-50〕。また、読谷村などでは雄の狒々が殺害を完遂する話が伝わっている〔大宜見 1979 : 71〕。奄美大島の「猿女房」では、若者が猿によって山奥の樹上に閉じ込められ、半猿半人の子を複数もうける。言い訳をして樹を下り川に通い、筏を作って逃げる。猿は子を次々と川に投げ込む〔稲田・小沢編 1980 : 587-588〕。人間が女であるものを「ゴリラ婿型」とする。

「ゴリラ婿入」のように、子が成長して大人になるパターンも伝わっている。「虎女房」では異類がトラ、舞台は離島で、トラは憔悴死する〔読谷村教育委員会、歴史民俗資料館 1983 : 60-62〕。「熊女房」では異類がクマだが、出会いと出産、死亡はほめかされるだけである〔ibid. : 69-70〕。以上のように、結末が「子は生き延び、立派な人物に成長するが、異類は心痛で死ぬ」(IV<sub>r</sub>とする)になるものを「熊女房型」とする。さらに構成が変化した I → II → IV<sub>r</sub> は有名な「熊の子ジャン」型 = ATU 650A の I = F611.1.1. である。

千野明日香は、南西諸島の類話を考慮したうえで比較研究を行なっている〔千野 1993〕。同論では熊女房型が代表例とされ、まず、この話型が異類婚姻譚に分類される。しかし、日本列島でよく知られているもの(鶴女房など)と違い、異類が人間の姿にならず媾合する点に特徴がある。さらに、この形式のものは中国大陸に多く見られる。それが「野人女房」説話である〔千野 1993 : 25-29〕。千野は、熊女房型が中国から伝播したという先行研究の説を受け継ぐ。だが中国では、異類はクマではなく野人である。千野は、野人の別称に「人熊」があること、沖縄民話の語りでは「人熊<sup>ちゅうくま</sup>」と言われることを指摘する。おそらく沖縄に伝える過程で「人熊」が「クマ」と間違えられたのだろう。やはり沖縄に生息しない猿やゴリラになっているのも、野人が合理化されたからであろう〔千野 1993 : 27-29〕——日本列島に広げるならば、これらは妥当な推測である。

千野は中国にも射程を広げ、山中に誘拐されたパターンを「山中型・野人女房」と名付ける。古いものでは『太平広記』に引用された大暦年間（766～779）の話がある〔太平広記研究会 2002：122-124〕。異類は「夜叉」で、人間側は女。川船で逃げる、子が引き裂かれるといった要素は揃っている。さらに、現代中国でも「野人女房」型体験譚は語られる。チベット北部版ではⅢがなく、人熊は射殺される。洞窟を見てみると子は殺されていた〔周 1991：90-91〕。別のものでも、さらわれた若者が動物の毛皮を工夫し、野人が走れないようにして逃げると、野人は子を持ち上げて引き裂いた〔ibid.：93-95〕。さらに黒竜江省のオロチョンおよびエヴェンキ族にも「野人女房」話があるが、異類はクマで逃走手段は川筏、引き裂かれた小熊は片方が人類の祖先に、もう片方が熊の祖先になった〔千野 1993：33〕。

中国では、『夷堅志』（1198）以降、舞台が孤島のものも現れる。『夷堅志』の説話は泉州の伝承で、異類に相当するのは意味不明の言葉を話す裸体の女で、男は、三仏齊（ボルネオ？）に行く途上で遭難したという〔齋藤ほか 2014：206-207〕。これを千野は「海島型・野人女房」と呼ぶ。千野の推測では、この話型は、中国人が東アジア・東南アジアの島嶼部の人々と交流したのを反映している。ただし中国の話型では、異類と結婚するのは男に限られる。船乗りは男性集団だから、とも論じられる〔千野 1993：37〕。

また、Ⅰ～Ⅱの要素に注目した王立は、熊女房型（Ⅳr）の古いものとして、『ジャータカ』（6世紀までにインド北部で成立）の第432話を挙げる〔王 2005：83-84〕。ここでは馬面の夜叉が野女の役割を果たしており、川で追跡が阻まれるという要素Ⅲも存在している。ただしⅢaは欠けており、神が夜叉に定めた境界が川だということになっている〔中村 1982：216-219〕。漢訳仏典には「緊那羅神女」版があり（8世紀初頭）、9世紀チベットの仏典にも見られる〔大正大蔵経 24 卷 348 頁 b 段 9 行 ff.; Schiefner 1908：229〕。だがⅢ全体を欠く。

千野は、「熊女房」や「野人女房」が、ヴォルフラム・エーバーハルトが制作した中国話型インデックスの121「メスグマの愛の死」に相当することを指摘する〔千野 1993：27〕。すなわち、「1 男が島に打ちあげられる／2 メスグマにとらわれ、連れていかれる／3 結婚し、子どもができる／4 男は救助される／5 メスグマは子どもを殺し、自分も死ぬ」〔馬場・瀬田・千野 2007：302〕。千野が指摘するように、「メスグマ」は「人熊」の誤訳であろう〔千野 1993：27-28〕。ゴリラ女房型のⅣとはやや異なるが、重なるところは多い。

以上のように、東アジアという視野から見ると、ゴリラ女房型はエーバーハルト 121 の変種として考えることができる。その分布域は、大陸では中国南部からチベットそして黒竜江省まで、さらに南西諸島をはじめとする日本列島に及んでいる。しかし、これでは『ターザン』にもティクリートにも届かない。

#### 4. 近世ヨーロッパから北米へ

『ターザン』の源流を調査したジョルジュ・ドッズもまた、ゴリラ女房型／ゴリラ婿型の説話を比較研究した論文を著した [Dodds 2005-06, 2007-08]。だが、その探索範囲は千野論文と重なっていない。そのため両者を接合すれば、より広い視野が開けてくることになる。

まずドッズが注目するのは、アントニオ・デ・トルケマダの『奇華園』 (*Jardín de Flores Curiosas*) である。同書は1570年出版の、スペイン語で書かれた奇譚集成で、英語を含めヨーロッパ諸言語に訳され、当時は広く読まれていた。そのなかにヨーロッパ最初の、やはり実話として語られたゴリラ婿型の出来事が載っていた。

犯罪に加担したポルトガル人の女が島流しにあった。女が嘆き悲しんでいると、山から猿の群れが下りてきた。ボス猿が憐れんで、洞窟へと連れ帰った。女は子を2人産んだ。数年後、立ち寄った船から人々が降りてきた。女は助けを求めて乗船し、そのまま出航した。それに気づいたボス猿は海にまで入ったが、追いつけないと分かると引き返し、子の一人を海に放り投げた。もう一人も投げる仕草をしたので、船乗りたちは子を助けようとしたが徒労に終わった。女は脱走および獣姦のかどで火刑を宣告された。しかし恩赦が降り、余生を修道院で過ごすことになった [Dodds 2005-06: 75-77]。

ドッズが紹介する事例はさらに17世紀のイタリア語文献、フランス語文献などへと続く。西欧近世の要素Ⅳでは、引き裂き以外の死因が多いが、フランス語文献の一つ (1752年) には四肢を引きちぎるという細部が加わっている [ibid.: 77-88]。時代をずっと下って、1995年に出たポルトガルの民話研究書 (1885年以降の出版物にある口承説話が収録) にも、舞台が森のなかの洞窟であるにもかかわらず、人間の女が船を発見するという民話がある [Dodds 2005-06: 89-90] <sup>(2)</sup>。

ドッズによると、ヨーロッパでは、「海島型・野人女房」とは逆に) 人間側はつねに女性であった。だが彼が見落としていた文献にはゴリラ女房型のものも存在する。1617年にパリで出版されたジャン・モケの『アフリカ、アジア、東西インド旅行記』 (英訳 *Travels and voyages into Africa, Asia, and America...*) である。舞台はカリブ地域で、相手は「インディアン」であり、異類ではなく人間になっている [Felsenstein 1999: 294-295]。

ドッズはさらに南北アメリカにも目を向ける。合衆国ケンタッキー州にゴリラ女房型の民話が存在するのである。1957年に紹介されたもので、あるとき、狩猟に出かけた男が遭難し、老いた獣人に会った。男はそこで暮らし、そして半人半獣の子が産まれた。しかし男は逃げ出し、船に乗り込んだ。獣人は子を連れてきて叫んだが、どうにもならず、そのまま子を二つに引き裂き、片方を船に向けて投げつけた。また、「毛深い女」という

話では、子どもの半身は毛深く、半身は無毛だった。毛深い女は人間の男を愛していたが、男はボートを作って脱出した。女は子を爪で引き裂き、毛深いほうを男に投げつけたという。マサチューセッツ州などではゴリラ婚型も知られていた [Dodds 2007-08 : 87-92]。ドッズ論文では南米の類話も紹介されるが (いずれもゴリラ婚型) [ibid. : 92-97]、結局、『ターザン』の源流にはたどり着けていない。ただ彼は、南アジアと東南アジアにも話型の広がりがあることを指摘する。

## 5. 起源としての南アジア・東南アジア

ここから3段落分はすべて [Dodds 2007-08 : 105-112] に紹介されたものである。まずブータンでは、雪男の雄が女と交わり、子は川辺で引き裂かれる。また、ネパール東部シンドゥバルチョークの話では、ある男が小川でカエルをとっていると、女のニャルム(獣人)に出くわした。ニャルムは男を洞窟に閉じ込め、入り口を大岩で塞いだ。1年後、男の子が、2年後には女の子が産まれた。男は脱出を考え、鹿の毛皮でニャルムと自分用に靴を作った。ニャルム用にはきつく縛り、脱げないようにした。そして男の子を連れて洞窟から逃げ出した。ニャルムは女の子を連れて追いかけたが、毛皮靴が合わず、痛みのせいでゆっくりとしか進むことができなかった。男が小川を渡るとニャルムは諦め、荒れ狂って女の子を小川に投げ込み殺し、座ってそれを食べた。

1993年に報告されたモンゴルの話では、獣人アルマスがゴリラ女房の役割を担っている。何らかの理由でアルマスの女が人間の男をさらった。山中で二人は子をもうけた。男はアルマスが水を苦手とすることに気づき、川を越えて逃げることにした。アルマスは川沿いに追ったが、水中に入ることはできなかった。怒り狂い、アルマスは子どもを引き裂いて殺した。

ボルネオ島のダヤクのあいだでは、オランウータンが人間の娘をさらう話が多い。しかし雌のオランウータンが男をさらう話もあるにはある。スペンサー・セントジョンの『極東の森林生活』(1862)によると、若い男がオラウータンに連れ去られ、樹上での生活を余儀なくされたが、数か月後に隙を見て逃げた男は毒矢で雌異類を射ち殺したという。要素ⅡもⅣもないが、樹上という点は奄美の「猿女房」と共通している。

東南アジア島嶼部については、人類学者のグレゴリー・フォースが、「猿に樹上に閉じ込められる、女側が半人半猿を産む、人間がココナッツなどの食料を与えられる、ココナッツ繊維でつくったロープで人間が逃げる、逃げたのを見て猿人が子どもを力任せに殺す」という話が北スマトラ、ボルネオ、ロテ島(ティモールの西)に伝わることを紹介している [Forth 2008 : 283-284]。スマトラとロテ島の話では、人間側が男性なのでゴリラ女房型、ボルネオはゴリラ婚型である。スマトラの話はフォースが直接聞いたもの、ボル

ネオは1911年の、ロテ島は1999年の文献にあるという [ibid. : 314]。

ドッズはほかに19世紀イラン（後述）や20世紀ロシアなどの類話を紹介したところで、それらについては検討せず、この話型が南・東南アジアを訪れたポルトガル人探検家によってヨーロッパに持ち帰られたのではないかという短い結論を述べる [Dodds 2007-08 : 112]。伝播経路の推測の妥当性について、このスペースでは検討できない。だがドッズの射程からは南西諸島も中国もジャータカ説話も漏れている。また、西アジアやロシアの類話にも触れることができていない。以下では、この欠落を埋める事例を探索する。

## 6. 西アジアからロシアへ

ヨーロッパ人がアジアに進出するはるか以前からアラブ商人がインド洋沿岸で盛んに活動をしていたのはよく知られている。その領域はインドネシアにまで及んでいた。そうした商人たちの見聞を集成した『インドの驚異譚』（10世紀、イラン）に、変形したゴリラ女房型の話を見ることができる。それによると、マレー半島に寄港した船乗りが、仲間たちが商売のため町に出たので、長期間、船番をしていた。そこに雌猿がやってくる。男は情がわき、性交してしまう。3か月が過ぎ、猿が妊娠しているのが分かると、男は恥じて小舟で逃げた。のちにその後の経緯を聞いたところ、猿が人間のような子を産んでいたが、船から投げ捨てたとのことだった [家島 2011 : 230-233]。要素Ⅰとは逆に猿が人間の領域に入り込み（無人の閉鎖空間という点では洞窟に類似する）、ⅡとⅢはあまり変わらないが、Ⅳが欠落しており、その代わりに猿親子が溺死している。

マレー半島からイランに伝わった変形ゴリラ女房譚がどのように展開したかは不明である。だが、時代はずっと下るが、広くペルシア語圏に伝わる「宝石商サリーム」という民衆伝奇ものにゴリラ女房型の挿話がある。現存する最古の「サリーム」写本は、明確に分かるなかでは1827年だが、一部は16世紀にさかのぼる可能性があるという [Marzolph 1994 : 90]。主人公のサリームが旅の過程で川を渡ると（または島に渡ると）、猿の大群に出くわす [Levy 1923 : 33-46; Marzolph 1994 : 82; Mills 1991 : 109]。猿たちが彼を宮殿に連れていくと、大きな雌猿がいた。サリームはその猿と結婚することになり、媾合してしまう。子が産まれるが、彼は雌猿の強い訴えにもかかわらず、子が真っ二つに引き裂かれるのを目にして逃げてしまった [Marzolph 1994 : 82, 87-88; Mills 1991 : 110]。先述のドッズが紹介したイランの話というのはこれである。ドッズの参照した1830年版のほか、現代アフガニスタン・ヘラートの口承版 [Mills 1991 : 110] には続いて「別の島に辿りついた」とあり、もとは海辺が舞台だったのではないかと考えられる。

冒険譚の挿話としてゴリラ女房型がありうることに注目すると、すでに『国際昔話話型カタログ』のATU485がこれを包括していたことに気づく。



ボルマ・ヤリチュカ（旧話型 485A を含む）

ツァーは王冠を手に入れるために男をバビロンに行かせる。男は王冠を盗み、追ってくるヘビたちを燃やす。男は1つ眼巨人のところに来て、巨人の目を見えなくし、巨人の腹の下のほら穴から逃げ出す。（参照：話型 1137.）男は荒女と子どもをもうけるが、男が荒女のもとを去ると、荒女は怒って赤ん坊を2つに引き裂く。男はライオンを助け、ライオンが男を家に連れていく。ライオンの警告にもかかわらず、男は酒に酔って自分の旅を自慢する。男は自分を正当化するために、ライオンを酔わせて、ライオンに酩酊の影響を示す。

注 荒女が登場するエピソードは単独でも記録されている（旧話型 485A）。〔ウター 2016：238；下線部引用者〕

下線部が示すように、「ボルマ・ヤリチュカ」という話型のなかに、ゴリラ女房型の話型が含まれている。ウターの言う「旧話型」は、改訂前のアールネ＝トムソン版にあるもので、当時は 485A という番号を与えられていた。ATU では削除されてしまったが、本稿では便利なので復権させる。

遡ってトムソンのカタログを見てみると、485A には「島の女とのエピソードのみ」とあり、事例としてアフナーシエフ『ロシア民話集』が挙げられている〔Thompson 1961：167〕。「島」というのは、まさしく「ゴリラ女房」の要点、I a に相当するものであり、この話型がゴリラ女房型を包摂できることが判明する。ただ、トムソンは 485 A の出典としてアフナーシエフ民話集を参照しているのだが、485 には C だけしかない〔Afanas'ev 1957〕。トムソンが 485 のほうで参照しているアンドレーエフの話型カタログ（AA とする）を見ると、AT 485 に相当するのは AA 485A で、AA 485B のほうに「島でのエピソードのみ（野女）」と書かれている〔Andreev 1929：38〕。だが AA 485A にも AA 485B にもアフナーシエフ民話集は示されていない。B では別の民話集が示されている。トムソンは両者を取り違えてしまったのだろう。アールネ版に 485 はないので〔Aarne 1910：21〕、この番号はアンドレーエフにより追加されたものだろう。

AA まで遡って確認すると、日本語訳で「ボルマ・ヤリチュカ」となっている話型名は、より正確には「ボルマー・ヤルイージュカ」（Borma Jaryzhka）だということが分かる。「ヤルイージュカ」は「貧しい船乗り」なので、話型名は「貧しい船乗りボルマー」と訳すことができる。詳細な点を裏付けるため、AT 485A について具体的な民話を参照してみよう。

一つ眼巨人から逃れたボルマーは、川を越える必要があった。そこには宮殿があり、夜になると若い女が現れた。女は兄が一つ眼巨人だったらしく、ボルマーを殺すと脅したものの、恋に落ちてしまったので、彼は脅されながらも同棲し、息子が産まれた。20年後、

ボルマーはひそかに川に行つて筏を作り、岸を離れた。そこに女が現れ、息子を引き裂き、半分をボルマーのほうに投げた。不浄な血が筏に付着して沈み始めたので、彼はその部分を切り落とした。女は怒り狂つたが、穢れた霊ゆえ川の上を飛べなかつた（現・ウリヤノフスクの話者）[Haney 2001 : 409–411]。

「ボルマー」の異類は毛深かったり猿のようだったりするのではなく、人間の姿をしている。また別の類話でも、やはり男が見た目は普通的女と結婚し、息子をもうけ、その後作った船に乗って逃げようとする。要素Ⅳはない（カレリア・ペトロザヴォーツクの話者）[ibid. : 416–417]。それ以外のロシア民話にもこの話型がある（ペルミ地方）[プロップ 1983 : 126]。

ロシア説話の引き裂き要素については、早くグレゴリー・ポターニンがモンゴルの叙事詩『ゲセル』の挿話との類似を指摘している [Potanin 1899 : 699–700]。彼が記録したブリヤート語版によると、主人公ゲセルの妻のひとりアルマ・モルゴンのところにやって来たゲセルは、息子しかいないことに気づく。そこで息子に、自分の進むほうとは違う方向を母親に教えるように言う。アルマ・モルゴンが帰ってきてゲセルを追うが、違った方向だったことに気づく。そこで怒って息子を引き裂いてしまう [Potanin 1893 : 102]。要素Ⅱが暗示され、ⅢとⅣは認められるが、水域にかかわるⅢ ab は欠如している。近年、セルゲイ・ネクリュードフはこの挿話が AT 485a であることを指摘し、現代モンゴルに類話が多いことを示している（上述のアルマスの仕業）[Neklyudov 2018] <sup>(3)</sup>。

管見のかぎり、これまで紹介した説話とエーバーハルト番号 121、そして AT 485A が大略一致することを指摘した研究は見当たらない。『昔話百科事典』の項目「異類女房・異類婿・異類婚姻」は、ドッズを引用しているが、この点を見逃している [Kawan 2008 : 566]。またアラブやペルシアの話型カタログでも無視されている [El-Shamy 2004 : Marzolph 1984]。唯一の例外は、「宝石商サリーム」を AT 485（および AT 485A）に割り当てたアゼルバイジャンの話型カタログである [Rüstəmzadə 2013 : 146]。

## 7. 部分的な比較分析

ここまで「ゴリラ女房」の属する話型を特定し、その世界的な分布をおおむね確認した。ここでは人間と異類を分断するものから、標準的な異類婚姻譚と比べてゴリラ女房型のような独自性が見えてくるのかを簡単に検討したい。

ゴリラ女房型（ゴリラ婿型を含む）で際立っているのは、千野明日香が指摘するとおり、異類が非人間的形象のまま人間と性交し、そして子が生まれるというところにある。たとえば、小沢俊夫による異類女房譚の三類型は、いずれも異類が人間的になることを前提としているが [小沢 1994 : 130]、ゴリラ女房型の大半はそこに収まらない。

まず形象の類型としては、類人猿（中国、ゴリラ女房、ベルシアなど）、人間に化ける魔物（イラク、ロシア）、「野蛮人」（『夷堅志』と近世ヨーロッパ）のように分けることができる。また、人間との近さという観点から社会性の尺度を用いると、孤独（東南アジアなど）、孤独・住居あり（ロシア）、群生・階層あり（ゴリラ女房など）、群生・住居あり（ベルシア）のように分けることができる。一直線に（通時的に）配列できるわけではないにしても、形象と社会性を組み合わせれば、大まかにそれぞれの説話の話型全体に対する位置づけを確認することはできる。この場合、標準的な異類婚姻譚に属するのは「人間に化ける魔物」のパターンのみだが、イラクのシルーフが人間的形像なのは連れ込むときだけであるため、やはり標準から外れている。

この観点からすると、もっとも標準的なものに近いのは、初出を近代まで待たねばならないロシアの「ボルマー」であろう。AT 485aのもとになった「ボルマー」の場合、異類は技術がないから追跡できないのではなく、河川だから渡ることができない。これは他にイラク、モンゴルおよびジャータカ説話にも確認できる。悪霊が河川を渡れないというモチーフは広く知られており（幽霊が渡れないのはE434.3、妖精はF383.2、魔女はG273.4、悪魔はG303.16.19.13.）、「ボルマー」もその一端であると考えることができる。

異類が人間的形像に化ける異類婚姻譚の基盤にあるアニミズム的存在論——毛皮や羽毛を脱ぐことで変身できる——では、人間と非人間は内面性が等価であり、文化が等しいため [デスコラ 2020：第5章]、ゴリラ女房型のように技術の非対称性によって両者が分断される物語は想定しづらい。この点で、技術ではなく異類の存在特性自体が渡河を不可能にするパターンは、アニミズム的存在論により近いと言える。だが「ボルマー」以外では異類は非人間的容姿をしたままであり、その点で純粋なアニミズムから少し離れた（つまり、非人間はどれだけ人間と交流しても非人間のまま）非人間の捉え方のほうが支配的な話型であると言える。

それ以外の大半の説話では、技術こそが人間と異類との別離を可能にしている。この点は、ゴリラ女房型が、標準的な異類婚姻譚よりも、人間と非人間のあいだには文化的断絶があるとする、近現代の私たちの思考に近いことを示している。ただしこれは、アニミズムに相対的に近い「ボルマー」的類型のほうが古いということの意味するものではない。そもそも動物が身近にいる環境に暮らしていれば、動物が造船技術を持たないことは理解できるので、昔話でも神話でもない、事実譚としてのゴリラ女房型説話において、動物が（求愛行動以外は）日常的な生活をしているのは不自然なことではない。もちろん、悪霊は流水を渡れないというモチーフを動物に移行した結果として、存在特性が理由としては成り立たなくなり、技術的な優位性が前景化したのがゴリラ女房型だという推測も成り立つだろう。

## 8. おわりに

本稿は「ゴリラ女房」の話型を特定し、その広がりをおおむね確認した。だが、ゴリラ女房型とゴリラ婿型が男女を入れ替えるだけで成立する点や、人間と動物がそのまま関係するというクシア性、水域と技術が人間と異類を分断する点、さらに異類と人間という二項対立を引き裂きとして具現化する結末など、興味深い論点が多い。また伝播経路の推測も、各地域の専門家による類話の探索によって、精密に進められる必要がある。ゴリラ女房型は今後、さらなる注目がなされるべき話型であろう。

### 注

- (1) この民話はインターネット上で話題になった。発端については「民話「ゴリラ女房」(<https://togetter.com/li/520192> 2013年6月18日作成、2021年8月30日閲覧)を参照。筆者も興味を持ち、国外の類例も含めて事例を列挙した文章を同人誌に掲載した〔廣田2020〕。本稿は、ロシア語資料を含め、多くの事例を追加し、それらの比較分析を試みたものである。
- (2) オーストリアのブルゲンラント州に伝わる説話では、美しい野女が人間の男と子をもうけたが、諍いが起きて二人が別れることになった。野女は子を連れていくか行かないかで迷い、脚を引き裂いて半分を男のほうに投げつけ、もう半分を抱えて戻ってこなかった(1966年の語り)〔Neweklowsky & Gaál 1987: 255〕。このバージョンでは、Ⅲが欠如しているが、特徴的なⅣは残っている。
- (3) ネクリュードフ氏は2021年2月にAT 485aに関するオンライン発表をしたとのことだが、筆者は議論の内容を確認することができなかった([https://vk.com/wall-24329991\\_1592](https://vk.com/wall-24329991_1592) 2021年2月4日投稿、2021年8月30日閲覧)。

### 参考文献

- 稲田浩二、小沢俊夫責任編集『日本昔話通観 25 鹿児島』1980 同朋舎出版  
ウター、ハンス＝イェルク『国際昔話話型カタログ 分類と文献目録』加藤耕義訳 2016 小澤昔ばなし研究所  
岩田準一『鳥羽志摩の民俗 志摩人の生活事典』中村幸昭(発行)1970  
遠藤庄治ほか編『国頭村の昔話 沖縄県国頭郡国頭村』1990 同朋舎出版  
大宜見光一「沖縄の民話話型総覧Ⅳ 本格昔話の異類婚姻譚に分類される話型」『沖縄民話の会会報』6: 58-94 1979  
沖田瑞穂『マハーバーラタ、聖性と戦闘と豊穡』2020 みずき書林  
小沢俊夫『昔話のコスモロジー』1994 講談社

- 後藤明『世界神話学入門』2017 講談社
- 齋藤茂ほか訳注『『夷堅志』訳注 甲志上』2014 汲古書院
- しげおか秀満『民話「ゴリラ女房」研究読本』2018 私家版
- 周正『中国の「野人」 類人怪獣の謎』田村達弥訳 1991 中央公論新社
- 千野明日香「沖縄の「熊女房」譚と中国の類話」『昔話 研究と資料』21: 25-47 1993
- 太平広記研究会『『太平広記』訳注 卷三百五十六「夜叉」(一)』『中国学研究論集』10: 111-136
- 出口瑞月『霊界物語 真善美愛西之巻』1924 天声社
- デスコラ、フィリップ『自然と文化を越えて』小林徹訳 2020 水声社
- トンプソン、S『民間説話 理論と展開 (下)』荒木博之、石原綏代訳 1977 社会思想社
- 中村元監修・補注『ジャータカ全集 5』松本照敬訳 1982 春秋社
- 馬場英子、瀬田充子、千野明日香編訳『中国昔話集 2』2007 平凡社
- 廣田龍平「ゴリラ女房は世界を駆け巡る」『たわらがた』仕舞号: 29-44 2020
- ブロップ、ウラジーミル『魔法昔話の起源』斎藤君子訳 1983 せりか書房
- 森田雅也『『白猿物語』成立論』『人文論究』42 (3): 1-18 1992
- 家島彦一『インドの驚異譚 1 10世紀〈海のアジア〉の説話集』2011 平凡社
- 読谷村教育委員会、歴史民俗資料館『儀間の民話』1983 読谷村教育委員会、歴史民俗資料館
- レヴィ＝ストロース、クロード 2018『仮面の道』山口昌男、渡辺守章、渡辺公三訳 筑摩書房
- 王立 2005「野女掠男故事の主題学分析」『山西大学学报 (哲学社会科学版)』28 (5): 83-88
- Aarne, Antti. *Verzeichnis der Märchentypen mit Hülfe von fachgenossen ausgearbeitet*. 1910. Helsinki: Suomalaisen Tiedeakatemia Toimituksia.
- Afanas'ev, A. *Narodnye russkie skazki*, tom 3. 1957. Moskva: Gos. izd-vo khudozh lit-ry.
- Altrochi, Rudolph. *Sleuthing in the stacks*. 1944. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Andreev, N. P. *Ukazatel' skazochnykh syuzhetov po sisteme Aarne*. 1929. Leningrad: Gosudarstvennoe Russkoe Geograficheskoe Obshchestvo.
- Blust, Robert. Linguistic evidence for some early Austronesian taboos. *American Anthropologist* 83 (2): 285-319. 1981.
- Dodds, Georges T. Monkey-spouse sees children murdered, escapes to freedom! A worldwide gathering and comparative analysis of Camarena-Chevalier Type 714, II-IV tales. *E.L.O. (Estudos de Literatura Oral)* 11-12: 73-96. 2005-06.
- Dodds, Georges T. Monkey-spouse sees children murdered, escapes to freedom! A worldwide gathering and comparative analysis of Camarena-Chevalier Type 714, II-IV tales. Beyond Europe (Part II). *E.L.O. (Estudos de Literatura Oral)* 13-14: 85-116. 2007-08.

- El-Shamy, Hasan M. *Types of the folktale in the Arab world: a demographically oriented tale-type index*. 2004. Bloomington: Indiana University Press.
- Felsenstein, Frank. *English trader, Indian maid: representing gender, race, and slavery in the New World*. 1999. Baltimore: Johns Hopkins University Press.
- Forth, Gregory. *Images of the wildman in Southeast Asia: an anthropological perspective*. 2008. London: Routledge.
- Haney, Jack. *The complete Russian folktale: Russian wondertales*. I. Tales of heroes and villains. 2001. London: Routledge.
- Kawan, Christine Shojaei. Tierbraut, Tierbräutigam, Tierehe. In *Enzyklopädie des Märchens*, Band 13: 555–565. 2008.
- Levy, Reuben. *The three dervishes and other Persian tales and legends*. 1923. London: Oxford University Press.
- Marzolph, Ulrich. *Typologie des persischen Volksmärchens*. 1984. Beirut: Orient-Institut der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft.
- Marzolph, Ulrich. Social values in the Persian popular romance *Salīm-i Javāhirī*. *Edebiyât* 5: 77–98. 1994.
- Mills, Margaret A. *Rhetorics and politics in Afghan traditional storytelling*. 1991. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Neklyudov, S. Yu. Skazaniya o Gesere: syuzhety, beruschie nachalo v mongol' skoy tradichii (knizhnye i ustnye redakcii). 2018. Moskva.
- Neweklowsky, Gerhard und Károly Gaál. *Totenklage und Erzählkultur in Stinatz im südlichen Burgenland*. 1987. Wien: Gesellschaft zur Förderung slawistischer Studien.
- Potantin, G. N. *Tangutsko-Tibetskaya okraina Kitaya i Tsentralnaya Mongoliya*. Tom 2. 1893. S.-Peterburg: Tipografiya A. S. Suvorina.
- Potantin, G. N. *Vostochnye motivy v srednieviekovom Evropeiskom eposie*. 1899. Moskva: Tipolit. Tovar. I.N. Kushnerev.
- Rüstəmzadə, İlkin. *Azərbaycan nağıllarının süjet göstəricisi (Aarne-Tompson sistemi əsasında)*. 2013. Bakı: Azərbaycan Milli Elmlər Akademiyası Folklor İnstitutu.
- Schiefner, Anton von. *Tibetan tales derived from Indian sources*. 1906. London: Kegan Paul.
- Thompson, Stith. *The types of the folktale: a classification and bibliography*. Second revision. 1961. Helsinki: Suomalainen Tiedeakatemia.
- Zeidel, Ronen. Tikriti regional identity as reflected in two regional myths and a folkloric tale. *Middle Eastern Studies* 41 (6): 899–910. 2006.

(ひろた・りゅうへい／世間話研究会)